

2015年度
海外研修・研究等 助成事業 研修報告

幸せは自他ともに

デンマークにおける学び合いの姿

静岡市立清水江尻小学校 尾武 久子

本校はコミュニティ・スクールの研究を始めて3年目になる。この過程で私は、学校・地域・家庭が一体となり協働的に学び合うことが、地方創生や人々の幸せにつながるのではないかという思いを強くした。そこで、高負担高福祉であり世界一幸福度が高いといわれるデンマークの教育や社会について学びたいと考えた。

基盤となる価値観とその背景

デンマーク人は、自分がどうあることが幸せにつながるのか、それを貪欲に模索し続け、しかも、他者や環境との共生意識や中庸の精神を大切にしている。つまり主体性と市民性、自他の幸福を統合的に求める生き方がそこにある。

こうした価値観の形成に大きく関わっているのは、歴史や教育である。北欧神話、童話作家のアンデルセン、ヴィットと呼ばれる和みを大切にする生き方、ヤンテの掟など人々の心の基盤となる背景が数多く挙げられる。また、教育関係者の話に登場したグルンドヴィの存在も大きい。19世紀半ばドイツとの戦争に負け国の行く末を案じた彼は、生徒と教師が対話を重ねて学び合うことの大切さを説いたという。これらが生きた学びとなって、人々の価値観を形成しているのだ。

未来を創る主体者として

森の幼稚園、生涯学習教育機関（エフトスコレ、フォルケフォイススコレ）、学校と地域と警察を繋ぐSSP、学童クラブなどの教育機関では、やはり対話が重視されていた。それは、自分はどうありたいのかという自己との対話であり、私たちはどうあるのが望ましいのかという他者との対話である。基盤となる価値観があり、だれもがいつでもどこでも学べる社会の中で、立場を越えた学び合いが保障されているのだ。

こうした学び合いは、まちづくりにも生かされている。自他ともに幸福な社会の実現のために、対話しながら進めているため、新旧のバランスがとれたまちづくりとなっている。まさに、国民全員がデンマークという国をつくるデザイナーであり、クリエイターなのだ。国づくりに携わる一員として、納税も含め責任を果たすことが、主体者としての自由を獲得しているのだと感じた。

学びをつなぐ

今回の研修を通して、これから取り組むべき課題が見えてきた。授業づくりでは、子どもたちが能動的に学習に取り組めるよう何のための学びなのかを明確にする。それは未来デザインを描き、その実現に向けてどう学び生きていくのか考え行動できる人間を育てるためだ。

自然との共存、中庸の精神などデンマークと日本には共通点もある。要は、何が大切でどのように考動していけばよいのか、それに気付く方法、“気付かせ方”の問題だろう。よって私は、自己や他者との対話や協働的な学びを再評価し、コミュニティ・スクールを生かした横断的・総合的な学習の可能性を今後さらに研究していきたいと考えた。そして、その実践を通じて、子どもたちや人々にとって生きることが楽しくなるコミュニティの形成に寄与したい。



フォルケフォイススコレにてグラフィックの授業



森の幼稚園にて。自ら小麦の粉挽き